石ころに語る母たち

● 農村婦人の戦争体験　小原徳志編　未来社刊

石ころに語る母たち

●農村婦人の戦争体験　小原徳志編　未来社刊

石ころに語る母たち

一九六四年九月三〇日　第一刷発行

定価　二八〇円

著者　小原徳志

発行者　西谷能雄

発行所　株式会社　未来社
東京都文京区小石川三〜七
電話（八一一）六九六六・（八一三）〇四五四
振替東京八七三八五番

落丁・乱丁本はおとりかえします。

（ふじ活版・萩原印刷・五十嵐製本）

まえがき

ときあたかも十九年目の敗戦記念日をむかえて、この本を世におくることが出来ることを、たいへんしあわせだったと思います。

この本は、私たちの町の婦人会が、昭和三十四年から〝かあちゃん農業〟にあえぐ農婦たちの「健康を守る運動」をおし進めて来ながら、昭和三十六年三月に第一回「農村婦人の戦争体験を語る集い」を開催し、健康を守る運動から「いのちを守る運動」「農婦の歴史に学ぶ運動」へと発展してからのこれら実践運動の中から生まれたものです。

この運動の歩みの中で、私は村の中の戦歿農民兵士の母たち、妻たち、遺児たち合わせて数百人の戦争体験の声を聞くことが出来ました。そしてあの戦争で、愛するものたちがひき裂かれた、遺族の方々のうけた戦争犠牲のきずあとは、戦後十九年の今日も癒えぬまま生ま生ましく、更に深く、重く負わされているという事実を知ったのでした。しかしこれまで、ことに名もなく貧しい農村婦人の戦争体験の声は、ほとんど誰にもとりあげられていませんでした。このことが私にこの本を書かせた動機でした。

私は村の遺族の方々の悲しみやなげきのことばを、あきらめのことばを、そしていかりとね

がいの声を、出来るだけ聞いたまま、生まのことばを大事にしながら、戦争体験の聞き書きとしてつづって来ました。

この戦争体験の聞き書きの仕事は、涙もろい私にとってたいへんつらいことでした。戦死したセガレのこと、夫のことなどをほりおこしながら、いろいろと語ってもらうのでしたが、おおかたの母たち、未亡人たちは、語りながらどうしても涙を押えることは出来ませんでした。そのためにことばをポキンポキンと短かく折るように語るのでした。このおふくろさまたち、未亡人たちの声を、ことばをノートにつづりながら、自分がいかにも非情なそして残酷な人間のように自分で思われて来て、いっそう暗い気持にさせられることもしばしばありました。はじめからノートを出すことがはばかられることもありました。途中でノートをとるのをやめてしまうこともありました。

ですから「聞き書き」といっても、この本の中におさめられている遺族の方々の声やことばのほとんどは、私のノーミソに刻みこまれて記憶に残った声やことばなのです。そのために、もっともっと大事なことばがあったのを聞きもらし書きもらしているかも知れません。自分がいたらないばっかりに、なんでもないように思ったことばの中にも、読者の皆さまへつたえなくてはならなかった大切な声やことばもあったことでしょう。すべての人々へ訴えなくてはならないことや、お互いのしあわせと平和な生活をいとなむ上にもっと大事な声やことばもあったろうと思います。

まだまだ明らかにされない戦争体験の事実もある筈です。これらのことは、この本を手がか

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

りにして、出来るだけ多くの人々が、自分の戦争体験をほりおこし、くらべあわせていただくことによってうめられることでしょう。或いは家族の皆さんで話し合うことも、たいへんのぞましいことなのではないでしょうか。いろいろなサークルや団体の集会などでもぜひこの本をとりあげて下さって、お互いの戦争体験を交流しあい、足らないところをうずめていただけたならばと思います。そして婦人といわず、青少年といわず、農民といわず、私たち庶民の戦争体験が一つの連帯感につらぬかれて、ハッキリと日本の歴史の頁に記録され、のこされることを、この本は念じ、期待しながら書いたものです。

おわりに、今日のいわゆる平和運動が、私たち農山村に生きる人々にとっても、日常的な、身近な課題であるのだということを共感し、更に広く、深く認識され、行動となって現われていく上に、いささかでも役立つならば、十五年戦争によって貴い生命を失われた人々の「たましい」に応えることにもなるのではないかというこころが土台となって、この本を私は綴ったこともいわなくてはなりません。

以上のようなことなど、本書の中からくみとっていただけたならばと、そんなねがいをこめてこの本を世に送りたいと思います。

なお、この本が生まれるについては、岩手の保健の大牟羅良氏、未来社の社長西谷能雄氏のおすすめと御配慮によるものです。写真はすべて友人の高橋正幸氏の提供によるもの、編集、割付、その他一切は未来社の松本昌次氏の御協力によるものです。そしてこれまで御助言や激励やお力添えをして下さった東京の生活をつづる会の牧瀬菊枝氏、山形市の須藤克三先生、岩

手県農村文化懇談会の世話人沢田勝郎氏、石川武男氏、矢崎須磨氏、斎藤彰吾氏、瀬川富男氏、劇団「ぶどう座」の川村光夫、愛子氏夫妻と座員の方々、和賀町婦人団体協議会の藤枝輝子氏、高橋トモエ氏、清水セイ氏はじめ会員の方々、和賀町遺族会長の伊藤亀次郎氏、斎藤政左衛門氏はじめ御遺族の方々、戦争未亡人の会の方々、藤根小学校の菊池敬一先生、岩手の生活をつづる会の及川和浩氏、三上信夫氏、和賀町史談会長高橋峯次郎氏、奥羽史談会副会長山本賢三氏にたいし、ここに厚くお礼申し上げます。

昭和三十九年八月

小原徳志

石ころに語る母たち

——農村婦人の戦争体験——

目次

まえがき……………………………………………………………一

石ころに語る母たち………………………………………………九

生まれた子供(ワラシ)も見ねェで戦死したス――オラのひとりムスコをとられたス――石ころに語ったもんだなス――貧乏人のセガレは死ぬしなア――血のナミダっとはこのことか――死ンデモ骨ッコモ帰ッテ来ネエ――ワレ体(カバネ)ヨワルト死ンダセガレ思ウノス――ダマサレダノス――死んだムスコの話コもできなくなった

ひとりぼっちで生きる母らありて………………………………四三

「生ぎでればァ、孫もあったベエ」と語った、おふくろさまの話――「ムスコの霊(ホドゲ)に手ッコ合わせることだげァ生甲斐(イギゲエ)なのス」と語った、おふくろさまの話――「もらって育であげた一人ムスコに戦死されだス」と語った、おふくろさまの話

この未亡人らの声を……………七七

もっと真実な目で見てくれ！――馬ッコ仕事で泣かされだス――子ども力に生きできたのに――神モ仏モ無エド思ッタ――ソウナラオ前エノ夫ヨコセ！――相談コしてくれる人ほしいナッス――戦争は三代たたるんだとス

父を知らずに育った子ら……………一〇九

オラも「父うさん」って叫びたい――学校にもろくに行けねェかったス――母さんゆるしてくれ――農婦は女でなくなる

凶作(かし)をめぐる話……………一三一

「七年饑渇(けかつ)に合うたってなア、一度の戦争(いくさ)に合うなってよウ」――五十三人も捨子を育てたお坊さんの話

写真　高橋正幸

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

石ころに語る母たち

第四回農村婦人の戦争体験を語る集い
1963.8.19
「オレ生きてるうちは、戦争さばゼッタイやらねえ」
「んだ、兵隊さば、こんどこそやらねえ」
主催 和賀町婦人団体協議会
和賀町 中央公民館

一　生まれた子供（ワラシ）も見ねエで戦死したス

二　オラのひとりムスコをとられたス

三　石ころに語ったもんだなス

四　貧乏人のセガレは死ぬしなア

五　血のナミダっとはこのことか

六　死ンデモ骨ッコモ帰ッテ来ネエ

七　ワレ体（カバネ）ヨワルト死ンダセガレ思ウノス

八　ダマサレダノス

九　死んだムスコの話コもできなくなった

一　生れた子供（ワラシ）も見ねエで戦死したス

「生れた子供も見ねエで戦死したス」このことばは、昭和三十六年の、まだ雪ぶかい三月六日、町の公民館で開催された「第一回農村婦人の戦争体験を語る集い」のときに《子どもを戦争で亡くした母親たちを中心にしたグループ》の分科会の話し合いの席で、白髪あたまの、おふくろさまが語ったことばです。

このおふくろさまのセガレは、嫁ゴをもらってから、六年たっても子どもがないままに兵隊に行ったということです。そして、たまたま軍隊から休暇で帰ったときに、腹が大きく(姙娠)なったと話すのでした。セガレも嫁ゴも、そのときは、姙娠したことを知るはずもなく別れたのでした。

その後、男の子が生れたのだそうですが、セガレはついに、わが子を一度も見ることも出来ずに戦死してしまったということです。

この話を聞いて、そのかたわらに座っていた、別のおふくろさんは、

「オラの長男ムスコの嫁ゴは、入営するときワラシ姙娠のス」と言うのでした。

その後、女の赤ちゃんが生れたとのことですが、写真でわが子を見ただけで、南方の戦場で死んでしまったということでした。

こんなことはざらにあった例かも知れません。中には、わが子がこの世に生れたことすら知

らずに戦死した兵隊さんさえあったとか。こんな話が出ると、おふくろさまたちはつぎからつぎへと、自分の戦争体験の話をほりだして語られるのでした。

「オラのムスコは、フィリッピンのルソン島で死んだス。手紙コ一本も来ねで、ソレキリ死んだス」と、自分で自分へものを言うように話すのでした。また別のおふくろさまは、

「オレ家（エ）の（の子）は、ニューギニアで、昭和二十年六月二日に戦死した。手紙コ一回来たっけが、嫁（アネ）コしまってらべ」といい、その手紙には《不幸な夫をもったと思って、親孝行してくれ》と書いてあったと語るのでした。

「オラ家で、いっこう手紙コこねエなって待づでいたれば、四年も前にハア戦死してらったとス」

他人さまのことでもいうように、こう申されたのは、村一番の声よしといわれ、村に昔から唄いつがれた民謡を知っていて、よく唄う林崎リエさんでした。リエばあさんは、町の民俗芸能祭には「田植唄」や「麦つき唄」などの農民の労働歌のほかに「南部さかた」などの祝い唄をうたって、村人たちのカッサイをうけたものでした。

この戦争体験を語る集いでは、特に戦没者の供養のために「和讃念仏」をあげてくださったのでしたが、その後間もなく、ぽっくりこの世を去ってしまいました。もうあのすばらしい農民の唄を聞くことは出来なくなりました。私は終戦記念日の頃になると、リエばあさんの「田植唄」や「和讃念仏」の声がよみがえり、聞こえてくるような気がしてなりません。

これらの、おふくろさまたちは、みな話ことばをポキンとみじかく折ってしまわれるのでし

た。それは、話しているうちに、ナミダがこみあげて来て、話ことばが声にならなくなってしまわれるからなのだということに気づいたのです。
本当の悲しみというものは、ことばや声にならないものなのだなア、ということを、私はこのときにはじめて、自分のこの目で、たしかに見ることが出来たように思うのです。そして私は、これらの名もない農村のおふくろさまたち、婦人たちの生ま生ましい戦争体験の声を、出来るだけ多く、そのまま書きしるしておこうと、わがこころに決めたのでした。

二　オラのひとりムスコをとられたス

「オラのひとりムスコをとられたス」あるひとりのおふくろさまは、こういってなげくのでした。
「とられた」とか「とられる」ということばは、とくに農民たちによくつかわれたことばではないでしょうか。
戦争中に、村人たちは、炉ばたや立ばなしなどで「ムスコ兵隊にとられた」「馬ッコを軍馬にとられた」「保有米も供出にとられでしまった」などと、よく話していたことを思い出します。
供出米の割当がひどくなり、完納できない農家では、お役人たちの屋さがしにあい、保有米すら徴発されることもさらにあったのです。その頃ある農家では、中風で寝たっきりの、じい

さまの床の下にモミ米をしきつめて、役人の目をのがれたということです。又ある農家では、モミ米を入れたカマスを、とっさに雪の中に投げこんでかくし、徴発役人の目をまぬかれたという話も聞きました。生きていくためにはたらいた農民たちのギリギリの知恵だったのでしょう。

　このように「とられた」とか「とられる」ということばは、それは生活をおびやかされるということへの農民たちの本音だったのでしょう。しかしその反面、「とられた」ということばのうらには「国のために捧げた」という誇りのような、あるいは自慢のような気持も、農民たちのこころの一方にあったのではないでしょうか。時の権力者たちは、その気持をあおり、一方では生活のくるしみの声を、いわゆる百姓のグチとばかりにおしつぶしてしまったのでした。

　いずれ「とられた」「とられる」ということは、遠いその昔から今日までの農民というものの人間を、そしてその歴史を、一口でよくいいあらわしていることばであることを、私は今更のごとく教えられたと思うのでした。

「オラ、ムスコを殺しさやったようなもんだった。召集されで家(エ)を出るとき『オ前(メ)エ、ソノママノ姿デ、帰ッテ来ル気ダッテカ。白(シラ)ッ袴(バカマ)ヲヘエデ帰ッ来(コ)』って、そういっておくり出したもんだス。戦死の公報きたとき、ギリッとナミダも出ねエがったもんだス」と、今になってナミダながらに語るおふくろさまもありました。

　いわゆる〝軍国の母〟という美名をおしつけられ、教育勅語を絶対とする教育によって子どもの頃から教育され、それが骨身にしみこんでいる、私たち日本の母たちでしたから、戦地に

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com